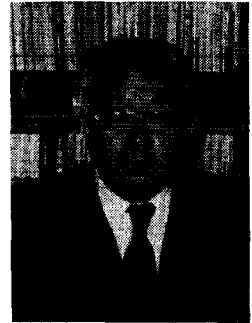


新しい展望に向かって



近藤 次郎

新しい年をむかえて、会員諸氏に心から新年のご挨拶を申し上げます。さて、恒例として、今年の展望を新年の学会誌に載せることになっています。

新しい年をむかえるにあたって、まず昨年をふりかえてみましょう。昨年の8月には第10回のIFORSがアメリカ合衆国の首都ワシントンで行なわれました。これには総勢31名が参加されて、この国際会議で大きな役割をはたし、学術発表においても、社交においても縦横に活躍されて、当学会の評価を国際的に高められたことは何にもまして誇らしいことであります。

また、たびたび本誌で報告したように、日本経営工学会、日本品質管理学会と一緒に日本学術会議に代表者を送りこむことになりました。これは学会の長年の宿願が達成されたことであります。

去る11月には、学習院大学、日本経済新聞社、余暇開発センターの主催する国際経済経営会議に当学会も主催者として加わり、活発な討論会が行なわれ、学会からも特別講演、ワークショップ、シンポジウムに大勢の会員が参加されました。本学会の存在を新聞等を通じて広く全国に徹底した意味でも大成功だったように思います。

また、昨年秋からはじまった会員増強運動は、理事諸君の奮闘によって着々その成果があがっていることは誠に喜ばしいことであります。

学会の活動として何よりも大事なことは、学問研究ですが、春、秋とも研究発表会はきわめて盛会で、またセミナーや小規模の研究会もそれぞれ活発に行なわれ、いろいろな分野の新しい、かつ

優れた成果が得られたことは大きな収穫でありました。

さて、今年はどうな年になるでしょうか。予測はORマンにとってきわめて重大なテーマであります。よく言われているように、それははなはだむずかしいことです。しかし、年頭に当たっていくつかの抱負をのべ、それを達成するシナリオを作るのもORの通常的な作業でありますので、ここで試みてみましょう。

第1は学術会議に代表を選出することです。これについては3学会で協議を重ね、手続きについては同意を得ました。2月末までには3学会統一候補者を決めなくてはなりません。各学会とも優れた人材が多くて原稿執筆の段階ではまだ1人にしぼってはおりません。新しい学術会議の会員は、日本の学術を代表するに足る広い識見をもっていて、そのうえにOR、IM、QCについても十分な理解をもち、3学会のため骨身を惜しまず努力する人でなければなりません。このよなうことははなはだむずかしいことですが、学術会議会員にだけにその責任を押しつけるのではなく、学会そのものも他の関連分野に広く目を開き、総体として進歩するように努力する必要があります。そもそもオペレーションズ・リサーチを定義することははなはだむずかしいことですが、QCもIMもその発達にもなって経営問題に関心を向けるならば、必然的に共通の分野に踏み込むことになりましょう。そこで狭い専門家になる

よりもこれらの学問を融合し、さらに高める方向に努力することが望ましいと考えます。産業界にいる人たちも、学者がそのような行動をとることを歓迎されるものと信じます。

学術会議の第5部「工学」の領域はいわゆる実学で、実際の役に立つことが肝心です。そこでORも実際に役に立つ理論を作ることが何よりも必要です。そのためにはいったいどうすればよいのでしょうか。それは経営の実践の中から問題を見だし、その一般的な解決法を模索することからはじまらなければなりません。いたずらに理論の上に理論を重ねて問題をむずかしくするばかりが能ではありません。このためにはいわゆる産学協同が特に必要であります。すなわち大学にいる研究者と産業界にいる会員とのあいだで共同で問題を捜し問題の核心に迫り、その实际的・効果的な解決法を見いだして、さらに研究室で理論的に高めていくことが必要です。このときいつでも理論が実際に役に立つかどうかを検討することが望まれます。

第5部には機械、電気、応用化学など物に則した学問が従来から大勢を占めていますが、これからはいわゆるソフトの時代です。すなわち物に則した学問ばかりではなく、問題解決法の理論を進めなければなりません。ここで言うソフトとは、コンピュータのソフトをも含めもっと広い物の考え方の全体のつもりです。

会員の皆様方がこのようなことをふまえて、今後の学会活動をますます活発にすることを期待します。

執行部は、関連学会と共同で文部省の科学研究費の枠の中で特定研究「高度自動化による経営システムの構造変革と影響評価の研究」を申請し、組織的に研究を進めることを考えております。この他にも皆様の周辺からもいろいろな問題が掘りおこされることが望まれます。前にのべたように春、秋の学会ではすでにこのような方向で多くの

よい研究が発表されております。オペレーションズ・リサーチ学会は学会ですから、何としても研究活動を高めることが一番大切であることは申すまでもありません。

今年はさらに進んで3学会連合講演会を実現し、シンポジウム、研究会も共催したいものです。学問の発達にともなって多くの学会が生まれることは自然の趨勢ですが、時には原点にかえてその融合を計ることも必要であると思います。

第2は国際化であります。日本OR学会はもちろんIFORSのメンバーであります。今年アジア太平洋地域のOR学会を連合して、APORSを組織し、情報交換や相互援助を推進したいと考えています。3月中旬に筑波で代表者会議を主催し、組織を固める方向に進んでいます。さしあたって情報交換以上に特に事業を考えていませんが日本のOR学会がアジア太平洋地域の発展に役立てばはなはだ幸いです。

そのほか、今年も当会固有の研究発表会、セミナー等をますます活発にして学問レベルを高めることに努力していきたいと思っております。

最後に、いつも申しておりますように、学会は会員のための存在です。会員の皆様1人1人が自分の学会と思ってその運営についても活発な意見を寄せられるように願っております。

以上のようにいろいろと希望をのべましたが、これらはすべて昨年度の年頭あいさつに前会長横山勝義氏がのべておられることに一致します。OR学会は創設以来、28年目をむかえますが、1つの伝統ができあがってきました。私は就任のさいにのべたとおり、この良き伝統を守り先人の示された方向にしたがっておよぼすながら力を尽したいと考えています。

会員の皆様方は年頭に当りそれぞれいろいろな決意や抱負をもたれることと思っております。これがそれぞれ達成されて新しい年がすべての会員にとって良い年でありますように祈念してやみません。